

3. 歴史的町並み保存の経緯と魅力

これらの景観に関する法律が整備される以前から、歴史的町並みを面的に保全してきた制度が伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）です。戦後の高度経済成長期に貴重な町並みが開発により次々に失われていることを憂慮する住民により、昭和40年代から町並み保存運動が展開され、それを受けて昭和50年（1975）に文化財保護法の一部改正により、伝建制度が誕生しました。制度ができたからと言って一気に町並み保存地区が増えたわけではありません。バブル期までは、新しい道路を通し建物を建て替えないと街の未来はないという考えが主流で、都市の発展は開発しかなく、発展（＝開発）と保存は対立する概念として捉えられていました。しかし、開発された結果どこの街も同じ顔になり、個性のない画一化された街が日本中に溢れることとなりました。発展のために建て替えられたはずの多くの商店街も衰退の一途をたどっていることは周知のことです。このような事例は残念ながら筑後地区にも多く見受けられます。さすがに、このままでは日本の地方の魅力が失われてしまうのではと危惧する人々が多くなり、前述のような景観法や歴史まちづくり法の制定に繋がりました。

これらの動きの中で地域の歴史と文化を色濃く現している歴史的町並みを保全している伝建地区が再び注目を浴び、現在、重要伝統的建造物群保存地区は全国で114地区に増加しました。福岡県には、朝倉市秋月、うきは市吉井、うきは市新川・田籠、八女市福島と八女市黒木の5地区があり、4地区が筑後地方に存在しています。町並みの魅力は、何と言ってもそこで生活が営まれ、生きている町であることです。テーマパークと異なり歴史的町並みは一朝一夕で出来上がるものではなく、長い熟成の時を経て形成された本物の町です。そこで暮らす人々との交流は通り一遍の観光と異なり訪問者の心に深く沁み入り、持続的なつながりが生まれます。伝統家屋は高度な技術と使用されている材料の質の高さにより長い寿命を維持しており、それらにより構成されている町並みが語る地域の文化は、地元住民だけでなく訪問者にも古里のような心地よさと安心感を与えます。エアコン等の設備がない頃に形成された町並みは、地域の風土に合った建て方がされています。それゆえ南北に長く気候条件が異なる日本には、バラエティに富む個性的な町並みが存在するのです。



茅葺き屋根の武家屋敷が残る秋月の旧戸波家



電線の地中埋設が実施された吉井の町並み



矢部川河畔の黒木の町並み

4. 歴史的町並みを生かした観光

早い時期から町並み保存を開始し、町並みを観光資源として活用したまちづくりが成功している伝建地区が、長野県南木曾町妻籠宿、岐阜県白川村荻町、沖縄県竹富町竹富島です。江戸時代には木曾の中山道の宿場町であった妻籠宿は昭和30年代から過疎化が進み一時は廃村寸前でしたが、かつての宿場町の町並みを保存し民宿を昭和43年（1968）頃から始めたことが功を奏し、また折からの旧国鉄のディスカバー・日本の波に乗り、全国に知られる観光地となりました。最近では妻籠から次の旧宿場町である馬籠まで中山道を歩く取組も行われ、年間約3万5千人が参加し、その内3分の1が外国人です。その道中の立場茶屋は休憩所

として活用され、地元「妻籠宿を愛する会」のメンバーがお茶でもてなして観光客に喜ばれています。「外人さんが増えて俺も英語はうまくなったよ。」と、おもてなし人が誇らしげに語ってくれました。

白川郷は、豪雪地域に残る多くの茅葺き合掌造り家屋を保存し民宿として活用し地域活性化を実践してきました。その個性的な景観が評価され平成7年に世界遺産に登録されると年間60万人だった白川村への入り込み客が一挙に倍になり、平成27年は約173万人となりました。世界遺産登録後は押し寄せる観光客と進出を狙う外部資本にどのように対応し、地域らしさと住民の生活を守るかが課題となっています。平成22年には、地域の文化資源であり観光資源でもある町並みを守りながら住民の生活環境を向上させ、なお且つ質の高い観光を持続的に発展させるためのまちづくりの指針となる「白川村世界遺産マスタープラン」を策定し実践しています。

竹富島にはハイビスカスが石垣越しに咲きほこる南国情緒あふれる赤瓦の町並みと、白い珊瑚礁のビーチに惹かれ、年間51万人もの観光客が周囲9kmの隆起珊瑚礁の小さな島を訪れます。この島も人口が平成4年には252人までに減少しましたが、町並み保存による観光活動により徐々に人口が増加し平成28年7月末現在で365人にまで回復しました。全国でも人口が増加している稀な離島です。これも島の歴史・文化である町並みや祭りを保存・継承し、それを観光資源として活用したまちづくりの大きな成果です。観光地化により水牛車や民宿経営などの雇用を生み出し若者のUターンを可能にしました。平成24年には高級リゾートホテルの「星のや 竹富島」が伝建地区外にオープンしました。島の伝統家屋に合わせた分棟型の宿泊施設群が周囲を灌木の森に覆われた敷地に建ち、周辺からは全く見えないように景観に配慮した工夫がされています。その上、既存の民宿とは競合しない高額な料金設定であるため、地元との摩擦は起きていません。



中山道の宿場町の雲間気を残した妻籠宿



観光客で賑わう白川郷



竹富島の赤瓦の町並み

5. 八女市福島のみちづくり

福岡県内の5つの伝建地区の中でも住民団体やNPOにより活発なまちづくりが行われているのが、私が町並み保存に関わっている八女市福島伝建地区です。平成3年の台風被害は甚大で、家屋撤去後の空き地や修理されずに放置された家屋が増えました。地域の衰退を目の当たりにした住民や行政が危機感を募らせ、伝統家屋が残る町並みを活かした活性化を目指したのが、まちづくりの始まりです。福島には17世紀初頭に城下町が築かれたが、慶長20年（1615）の一国一城令により廃城となり、城下町としての地割りを残しつつ町場が在方町として発展してきました。旧外堀は用水路として使われ続け現在も残っています。伝建地区はかつての城の南側を取り巻くように走る旧往還道に沿って設定されており、主に江戸時代末から明治時代にかけて建築された入母屋2階建て白壁土蔵造りの伝統町家が数多く残っています。保存することに同意を得た伝統家屋は主屋60棟、離れ10棟、土蔵3棟、倉庫や寺社も入れると計121棟あります。町並みには仏壇・提灯・和紙などの伝統産業が今なお息づき、江戸時代から続く「燈籠人形」が福島八幡宮の秋の放生会に上演奉納されるなど歴史と文化が継承されている町です。そこには、町並みを支え地域の活